仮面の外し方

山上翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の外し方

【Nコード】

N6667I

【作者名】

山上翠

【あらすじ】

学校では風紀の鬼と呼ばれ、お堅いイメージの生徒会副会長。それが私…

1 1 (前書き)

まだ序章です。気長にお付き合いをお願いします！

今思い返してみても、わからない。
どうしてこれほどまでに彼に惹かれてしまったのか

「よし」

鏡の前の自分の姿を確かめる。

いまどきのメイクって便利。素の顔を隠すことなんて造作もない。

「じゃあ、行って来ます」

足にまとわり付く長いスカートに内心ため息をつきながら、私は家を出た。

「おはようございます」

生徒会室のドアを開けると、背の高い影がこちらを振り向いた。

「おはよう」

会長の瀬戸内晃斗^{あきし}。マンガなんかでよくいるような、顔が良くて人当たりが良くて、文武両道の生徒会長。私はそういう人って胡散臭いと思ってしまうのだけど、校内の女子の人気はやはり高い。

「さすが風紀の鬼。服装検査のときはいつも以上に制服の着こなし完璧だな」

「ありがとうございます、ほめていただいて」

「ほめてない。…てゆうか敬語はやめてくれっていつも言ってるだろ、理緒」

ニッコリと王子様オーラ全開のほほえみ。背中にあたっている朝日が後光のように見える。

「私も下の名前で呼ぶのやめて下さいといつも言ってます。それより、そろそろ時間です、瀬戸内会長」

私高見沢理緒は、そのキラキラしたオーラに対し限りなく冷たい態

度を返す。

「はいはい。優秀な高見沢副会長」

あたしたちは並んで校門に立つ。

いつもの通り、違反者だらけ。女子限定。

違反してれば瀬戸内会長が声をかけてくれるから、と気合い入れて違反してくる者多数。気合いの入れ方が違うでしょう…

「あゝ。また高見沢さんもいるの〜？」

「ほんとだ〜！さっすが風紀の鬼」

あちこちで声を抑えることもなく女の子たちが話している。私が会長と一緒にいるのが気にいらなのだろう。

私だってやりたくてやってるわけじゃないんだけど…。

「てゆうかさ、いつものことだけど、あの髪型ヤバくない？高校生じゃありえないでしょ」

「女捨ててるよね〜、しかも会長と並んで立っていると余計目につくよ」

こういうことを言われるのも日常茶飯事。

でも、それでいい。そういうふうに見られている方がいい。

ひつつめ髪に分厚いレンズの眼鏡。スカートは膝下、襟は開けない。肌がかすんだように見えるように、顔には濃い色のファンデを上手く塗る。これだけやれば、私は仕事命で外見に気を使わないお堅い女そのもの。周囲からもそういうイメージで通っている。

「気にするなよ」

聞こえていたらしい。会長が小声で言った。

「別に私は気になりません」

少し窮屈ではあるけれど、そう思われている方が、私は安心できる。女子とは裏腹に、男子たちはこちらを見ずそそくさと通り過ぎていく。

そう…これでいい。

「理緒ちゃん」

この声…

「おはよ」

「草野先輩…なんですかその格好は。学校に喧嘩でも売ってるおつもりですか？」

ブレザーこそ学校指定のものだが、シャツは禁止されている柄のあるもの、下などジーパン。加えて茶髪にピアス。

ありえない…まあ、似合ってはいるが。

「違うよ。だって違反してなきゃ、理緒ちゃん口きいてくんないでしょ」

「当たり前です」

「ほんと冷たいよね、理緒ちゃんて」

「下の名前で呼ばないで下さいと、何度言ったらわかって下さるんですか」

「何度言ってもわかんない」

「先輩がそこまで頭の悪い方だとは知りませんでした」

「やだなあ、わかってるくせに」

彼、草野達哉先輩は、かまわれたくて違反してくる馬鹿者、唯一の男子バージョン。何度こうしてイヤミを言ってもまってもまるで効果がない。「俺にちゃんとして来て欲しいんなら、理緒ちゃん一回デートしてよ」

「嫌です。先輩なら立候補してくれる方がたくさんいるでしょうから、デートはその方としたらいかがですか？」

彼は校内では遊び人を通っている人でもある。

「ふうん。それならこれからもずっと違反してくるけど？」

「どうぞご勝手に」

「へえ…いいんだ？風紀の鬼とも呼ばれる生徒会副会長が、風紀の乱れをなくす対策しなくても」

「そういつた挑発には乗りません」

そう言うと先輩は白い歯を見せてニッコリ笑った。この人は会長とは別の意味でうさん臭い。

「手強いね。さすが理緒ちゃん」

ヒラヒラと手を振って校舎へ向かう。

「お仕事頑張つてね」

励ますよりその格好直して下さい…

思わずため息が出る。ああいうモノ好きさえいなければ、私の日常は平和なんだけど。

「お疲れ」

教室に行こうとしていた私に、会長が言った。

「お疲れ様です」

歩き始めた私の横に、会長が並ぶ。

「ちよつと知らせておこうと思って」

「何か？」

「今日、君のクラスに転校生が来るそうなんだけど、その人を放課後生徒会に連れて来てくれる？資料を渡したいんだ」

この中途半端な時期に転校生？珍しい。

「はい」

「よろしく。聞いたところによるとイギリスからの帰国子女らしいね。本当は4月から編入予定だったけど、向こうでバタバタしてて今頃になったんだそうだ」

「そうですか。珍しいですね」

「そうだね。じゃあまた放課後」

「はい、必ず」

会長の言った通り、いつもより早くやって来たクラス担任はこう言った。

「突然だが今日は転入生を紹介する」

途端にクラス中がざわめいた。

「入って」

ガラ

入って来たその人を見た瞬間
私は目の前が真っ暗になった。
。

日焼けした彫りの深い横顔。柔らかそうな黒髪。男っぽく色っぽい手…

「高市真しんです。よろしく」

低く震える声。何も変わらない。

どうしてここに？

「高見沢！おい！」

「え…？」

「聞いているのか！」

しまった。いつの間にか授業が始まっている。

「すみません。もう一度よろしいでしょうか」

「高見沢がぼうつとするなんて珍しいな。未回収のイタリアについて、説明してみる」

「はい。未回収のイタリアとはトリエステ、イストリア、南チロルなどのことで、19世紀のイタリア統一の際オーストリア支配下に残された地域です」

「その通り。この問題はこれから後もイタリアとオーストリアの間にしこりを残した。では次…」

授業など頭に入って来ない。

思っているのはただ…

ようやく放課後になり、教室を出ようとしたとき、

「高見沢さん」

呼び止められた。

「何？」

振り返らずに、言った。

誰かは…見なくてもわかった。

ぐいと腕を捕まれ、引き寄せられる。

悪魔が耳元で囁いた。

「一緒に来いよ、理緒」

やっぱり…気づかれてた。

「申し訳ありませんが、私は今から生徒会が…」

「へえ。ずいぶん堅いキャラ作ってるんだな。こんなダツサイかつこして」

「離して！」

力任せに真の腕を振りほどく。

こうなったのは誰のせいだと思ってるの？

私は高校に入って初めて、廊下を走った。鼻がツンとして目の奥が熱くなる。

泣かない。

泣かない。

絶対。

バタンツ

勢いに任せて生徒会室のドアを乱暴に閉める。

「高見沢…？」

「あ…すみません」

そのたった一言でさえ、満足に声にならない。

「どうかしたのか？」

会長が近寄ってくる。

「来ない…で…」

叫ぶように言っていた。必死だった。せめて、このグチャグチャした気持ちがおさまるまで…

会長の足が止まる。

「泣くと、ファンデーション、取れるぜ」

さらりと、言われた。

「え…？」

思わず、顔を上げる。

なんで、そんなこと…？

息を呑んだ。

そこには、生徒会に入ってからこれまで一年以上の間、一度たりとも見たことのない、顔があった。

いつもの会長の、穏やかで優しい笑顔とはまるで違う。唇の端だけ吊り上げた、酷薄そうな微笑み。

「なん…で…」

コワイ。

コワイ。

ヤメテ……

「せっかく獲物が尻尾を出してくれたんだ。逃す手はないだろ？」

笑みと同じ、別人のような声。

鋭い鷹の目が、私を捕らえる。

「な…に…？」

「何？それを俺に言わせるわけ？わかってるだろ？」

「…わからないッ」

嘘だった。彼の眼を見れば、わかった。ただ認めたくなかった。

「へえ…」

くすりと声をたてて笑い、彼はたった三步で私の前に立った。

ダンッ

「や…ッ」

ドアに押し付けられ、片手の自由を奪われる。

「やだっ！」

抵抗すらできない。彼の眼から、逃れられない。金縛りにでもあったかのように。

彼の右手が乱暴に私の髪をほどき、ムリヤリ眼鏡を取り去る。

広くなった視界いっぱい、彼の顔が映る。

「これが本当のお前だろう？高見沢理緒」

彼の眼に映りこんでいる私…

これが本当の私。

女優のタマゴだった母と、若い頃はモデルのスカウトが絶えなかったという父の間に生まれた私は、幼い頃から、可愛いとか美人だとよく言われた。言われ過ぎるくらいだった。私自身も、悪い気はしなかった。私への褒め言葉は、そのまま大好きな父や母への言葉なのだ、子供ながらにわかっていたから。

「お前が高見沢理緒だよな？」

高市真に突然声をかけられたのは、中学に入っすぐだった。

「そうだけど」

「俺は高市真。知ってるよな？」

「うん…一応ね」

中学から一緒になった高市真は、入学当時から有名人だった。まだまだ子供っぽくて幼さの抜けない男の子たちの中、彼は一人、飛び抜けて“大人”だったから…身体も、態度も、考え方も。

「超美人がいるって先輩たちがやたら騒いでるから、ちょっと顔見たくてさ。確かにお前、美人だな」

「どうも。私も高市君の顔初めてちゃんと見たけど、ホントにかっこいいね」

「サンキユ。…つか、高見沢ってもう入る部活決めた？」

「ううん、まだ。というより部活はやんないつもりなの」

「ふうん…そっか。なら俺バスケ部なんだけど、お前暇なら見に来いよ」

「ん。まあたまになら」

「ああ。てゆうか先輩たちがお前誘って来いってうるさくて。自分でやれって感じだよな」

「使われたんだ？」

「そ。まあお前も、知らない先輩にいきなり声かけられるよりかマ

シだろ？」

「まあね」

初対面だったのに、私はいつのまにか打ち解けていた。

それから私は、月に何度かバスケット部を見に行くようになり、高市真とも、顔を合わせれば口をきくようになった。

彼に惹かれるのに、それほど時間はかからなかった…。

「付き合ってくれないか？」

中学二年の夏に、言われた。

来る者拒まずの主義で、告白されれば付き合っけれど、自分からは決してそういうことは言い出さない。一年間見てきた高市真は、そういう男だった。だから、驚いた。

「どうしたの、急に」

「嫌？」

「だって…らしくない」

「かもな」

真はふわりと笑い、私の腕をつかんで引き寄せた。

その腕の力の強さと、私の指に絡められた彼の指の妙な色っぽさを、私は今も忘れられない。

「お前は、来るの待ってぐずぐずしてたら他の奴にかっさらわれる。それに…俺もうこれ以上、好きな女目の前にして友達ごっこやんの、限界」

彼の眼が、私を見つめる。「嫌なら逃げろよ」

彼の顔が、近づく。

私は逃げなかった。目を閉じて、彼のキスを受けた。

好きだった。彼のこと。真のことが。

傷つけられたら、立ち直れないくらいに。

1 4 (前書き)

少しだけですが晃斗目線入ります

獲物・高見沢理緒の、素顔。

切れ長の綺麗な目。端正な顔立ち。クセのない艶やかな黒髪。涙で落ちたファンデーションの下からのぞく滑らかな白い肌。改めて見て、改めてわかった。

俺の獲物は、想像以上に美味だ。

「さて…どうしようか？理緒」

少し怯えたようにして俺を見返す美しく深い目に、意地悪く問う。もう、待たない。逃がさない。お前の、負けだ。

「さて…どうしようか？理緒」

会長 いや、瀬戸内晃斗が、言った。

どうしようか？

その一言で、わかった。

「…言わないで…」

身体が、震える。この顔を、この本当の顔をさらせば…

結果は火を見るより明らかだった。

二年前と、同じことが起こる。

「言わないで…」

もう…あんな思いをするのは嫌。これ以上、傷つくのは嫌。

目の前の彼の顔が、涙で曇った。

クスリ、と、もう一人の悪魔が笑う。

「んッ！！」

次の瞬間、唇が塞がれた。

「ンッ」

頭を抱え込まれ、がちりと押さえ込まれて逃げられない私を、彼

の唇と舌が、強く貪る。

「ふ…う…んんッ」

キスは、初めてじゃない。真ともしたことがある。でも…こんな、身体ごと相手の中に溶けてしまいそうな いや、溶けてもかまわないと思ってしまうような、深いキスは、知らない…！

怖い。

怖い…！

どうしていきなり、こんな…

さっきとは別の理由で、涙が出た。

「泣くほど、良かった？」 耳元に、彼の吐息がかかる。

やっと唇を離れた彼は、息も切らしていなかった。私は彼の目を見るだけで精一杯だったのに。

「キスだけで、こんなになるんだ？」

意地悪く、彼が囁く。

「や…」

わざと耳元で…ッ

「もう弱点ひとつ、見つけた」

耳朶を吸われた。

声が上がリそうになるのを、必死でこらえる。でも、悪魔は満足そうに笑った。

「キスの先に行くのが楽しみだな」

「なッ…！」

無理矢理あんなキスしておいて、これ以上まだ何かする気なの？

思わず、彼を睨みつけていた。

「まさか、これで俺が満足すると思ってたわけ？ 甘いね」

ビリッ

ブラウスのボタンが吹き飛ぶ。

「次に俺の前で隙を見せたら…」

彼の長い指が、私の肌に触れる。首筋…頬のライン…鎖骨…

動け、ない

「お前を犯す」

そう言つて、彼は私の腕を離し、立ち上がった。

「安心しろ。俺は自分の獲物を他の奴に渡すようなことはしない…
もちろん、例の転校生にも、な」

「え？」

転校生…真のことを、知ってる？

私と、真の関係も？

「じゃあ、また明日ね。今日の分の仕事は、やっておくよ」
いつもの王子様キャラに、戻っている。

「あの…」

会長はにっこりと王子の微笑みを残し、生徒会室を出て行った…。
質問をする余地すら与えてくれないで。

残酷なくらいに赤い夕日に照らされて、私はしばらく座り込んでいた。情けないことに、完全に腰が抜けてしまっていて、立てなかったのだ。

「どうしよう…」

今日一日であまりにいろいろなことが起こりすぎて、頭が混乱している。

突然転校して来た真。

初めて見た、絶対に他の誰も知らないだろう瀬戸内晃斗の裏の顔。

彼が私の秘密を知っていたこと。

私を見据えるあの眼。

そして強引で激しいあのキス

「どうして…」

わからない。

わからない。

好きでもない女にキスして、何が楽しいの？

あの人は、私をどうしたいの？

そして一番わからないのは…

どうして私は、今もあのキスの感触を追ってるの…。

学校を出る頃には、もう真っ暗になっていた。

あれから、もう一度ファンデを塗り直したり髪をセットする気になれず、そのまま学校を出た。

どうせこんな遅くには誰にも会わないだろうし、私の家は学校からほんの20分ほどのところにある。

もともと、わざわざあんな格好をして歩きたいわけじゃないし…

校門へと続く見慣れた石畳が、月の光に塗れていた。冴え冴えとした、不思議なほど美しい月だった。

「綺麗…」

思わず、つぶやいていた。

いつもはここまで遅くならないし、歩いているときも生徒会のことやら勉強のことやら考えているから、こんなふうになにかにしみじみと見とれて、心を動かされることはない。

「今日は、それどころじゃなかったから…」学校も勉強も生徒会も、全部頭からすっ飛んでしまっている。

でも…

ちよつとだけ、感謝かもしれない。

こんなに綺麗な月に気付かないのは、惜しいもの。

もし今日がいつも通りの一日だったなら、私はここまで手放しに月の美しさに感動することはなかっただろう。それどころか、月が出ていることにすら、気付かなかったかもしれない。

だから…

あ…れ？

私の目に、こちらへ向かって歩いて来る人影が写った。

誰？

背の高い男の人のシルエット。

下校時刻はとつくに過ぎていくのに。

人影はだんだん近付いて来る。

誰！？

「理緒」

私からほんの１メートルくらいの距離に立ち止まり、その人影は言
った。

「遅かったんだな」

その声は、瀬戸内晃斗のものだった。

「…先に帰ったんじゃない?」

「お前を待ってた」

「え?」

もしかして、今までずっと外にいた…? 二時間以上も?

「どうしてそんなこと」

彼が動いた。腕を掴まれ、引き寄せられる。

整った顔が、近づく。

月明かりの中で見る彼の顔は、心なしか昼間太陽の下で見るよりもずっとキレイで、人間的だった。

「こんなに遅くまで、何をしてた」

裏の声と言う。なぶるように。

この男は、わかっている。私が何をしていたか、何を考えていたか。ほとんど確信的に。

「俺のキスをずっと、反芻してたんじゃないか?」
ほら。

唇の端がすいと上がり、半月形をかたちづくる。

自分の頬が熱く火照るのがわかった。

凶星だった。

確認されるまでもなかった。

そんなことを確かめるために、わざわざ待ってたっていうの?

「 違います」

嘘をついた。

見抜かれるであろうことは、わかっていたけれど。

だって、悔しいもの。この悪魔の思い通りになるなんて。

「そう?俺のことは頭に浮かばなかったわけ?」

「…当たり前でしょう」

そんなわけはなくて。

本当は他のことが吹っ飛ぶくらい浮かんでいたけれど。

「あんなキスくらいで、私がどうにかなると思っていたんですか」
嘘。

本当は今もどうにかなりそうだけど。

「へえ…そう」

彼は言った。笑みを消さずに。

平気な顔を装って、私は応じる。

「ええ」

強気だった。こんな見え透いた嘘でも、本当のことを言うよりはま
だいい。

クス

「じゃあ…俺のことしか考えられないように、してやらないとね」

…！！

「ンッ…！！」

ま…た…

逃げようとすると、腰に手が回されてさらに密着させられた。

彼の舌が、容赦なく私の唇をこじ開ける。

「や…んんッ」

さつきより、激し…

「んう…は…あ」

激しすぎて息ができない。

何も考えられない。何もかもどうでもいい。奪われて、墮されて、

喰らい尽くされても　そう、思ってしまう。

身体力が抜けていく。

立ってられない！

ガクンッ

膝を折った私を、彼が抱き留め、抱える。

「もう降参？」

彼の胸が思い切り顔の前にある。

予想以上に厚くて、男っぽい　真と同じように。
って私、何を考えてるの？

彼の長い指が、私の髪を優しく梳いた。

その手つきは…真のものに、よく似ていた。

「嫌…」

なんで。

どうして。

何のために今まで素顔を隠して来たの。

すっかりしてよ。

こんなのに流されてないで。

「…離して」

精一杯、睨みつけた。

「私はそう簡単にあなたに狩られるつもりはない」

あなたが私を狩るつもりなら。

私は私なりに、獲物は獲物なりに、狩人を利用して、翻弄して、逃げ切ってやるだけ。

そして狩人は、やがて己より強いものによって、喰われる

「そうこないと、面白くない」

狩人は、笑った。

「まあ、さっきのキスで腰抜けになってるお前に、できればだがな」

「っ…」

言い返せない。

確かに私は、彼のキスを受け入れてしまっていた。

一度目も、二度目も…私は嫌では、なかった。

私の腰にあった手が、ふっと離れた。

「送って行く」

耳元で、彼が囁く。

は…？

「そんな親切、要らない」

急に何なの？

「今さらそんな紳士なフリしても、似合わない」

そういうこといきなりされると、ますます真とダブるじゃない…

「送り狼が怖いか？」

そう言う目が笑っている。

違う。

「そんなこと、言っていない」クス

悪魔が笑った。

「何？」

「して欲しいわけ？送り狼」

「違うッ！」

どうしてそうなるの？

「そういうふうに聞こえたけど？」

「都合良く解釈しないで。私もう帰る」

せっかく月が綺麗でいい気分だったのに、瀬戸内晃斗のせいで台なし。

歩き出すと、彼が横に並んだ。

「何？」

「いや、別に」

そっけなく言葉が返される。

ほんと、何を考えているのかわからない男だ。表でも、裏でも。

校門まで来たとき、

「月の光が」

ぽつりと彼が言った。

「こんなに澄んだものだったのに、初めて気が付いた」
思わず、彼を見つめてしまった。

裏の顔のときでも、こんなこと言うんだ…

しかも、この男はそういうセリフが妙に似合う。

「私もさつき、そう思いました」

「…キスしながら？」

「ちがつ」

何なのよ？！

素直にまともな反応をした私が馬鹿だった…

どれだけ私を振り回す気なの！？

「キスのときはあなたのこと以外何も浮かばなかった！　そう言え
ば満足するの？」

ヤケになって言ってしまったから、口を押さえた。

やった…

「へえ…」

悪魔復活。

「そうなんだ？」

「…っ」

悔しい！

クス

「それはそれで嬉しいけど」

何よ。

「俺はお前とキスしながら、お前の髪に落ちてる月の光が綺麗だと
…思っていた。

そう言うつもりだった」

え…？

「思わぬ収穫ってやつだな」

私の馬鹿…

自分から、何言ってるの？

さつき、獲物なりに足掻いてみせると思ったばかりなのに。これじ
ゃあ狩って下さいと言っているようなものだ…

もう、何も言わない。

何を言っても、今のこの状況では私は優位には立てないだろうから。それどころか、墓穴を掘ってしまいそうな気がする…

「…家、ここから20分だったな」

黙り込んだ私に、何事もなかったかのように彼は言った。

「はい」

それから20分、私たちは何も言わずに、並んで歩いた。歩道と夜空とを、交互に見ながら。

まるで一枚の絵画のようなあの風景が、頭から消えない金の雫を振り撒く明るい月光。
白く不気味に立つ校舎の建物。

夜の闇の中にぼんやりと浮かぶ石畳の灰白色。
そして、そこを歩いて来る…

今にも月の光に紛れて消えてしまいそうな…
儂く、美しい…

俺の獲物。

俺の、アルテミス。

ピピピピッ

カチ

朝？

頭がぼつつとする…

昨日は、あまりにいろいろありすぎて…
独りでにため息が出た。

いつも学校には始業一時間前には着くようにしている。

朝は好きだ。

特に今頃の…春の終わりから夏にかけての朝は。
いつも通り、教室にはまだ誰もいなかった。

ふう…

今日は数学の練習問題をやろう。

「おはよ〜」

しばらくして、背後に明るい声を聞く。

「さすが高見沢さん、来るの早いね」

「おはようございます、園田さん」

園田千鶴。おおらかでサバサバとした性格で、男女問わず慕われている女の子。“近寄り難い真面目な人”の私にも、何のこだわりもなく話し掛けてくる。

「相変わらずその敬語、抜けないよね…」

「すみません、癖なもので」

「ん、別にいいんだけどさ。それより、あたし今日数学当たるんだけど、わかんないとこあったんだ。教えてくれる？」

「はい」

話していると、皆から好かれている訳がよくわかる。この人は、人を無理矢理何かの枠に当てはめることをしないのだ。

「ねえ、高見沢さん」

「はい？」

「何かあった？」

「え？」

それに、鋭い。

「ああ、ごめん突然。何となくいつもと感じが違っかと思ってさ」

「そっ…ですか？」

さすがに瀬戸内晃斗の裏の顔を見てしまった上にキスされたのがあまりに鮮烈で頭から離れなくて、とは言えない。

「うん。何も無いの？」

「特には」

「…そっか」

あまり納得しているようには見えなかったけれど、彼女はそれ以上聞こうとはしなかった。

彼女になら、いつか話せるかもしれない。

でも、まだ

覚悟していたのに、真は授業前には現れなかった。

ほっとしたような、がっかりしたような…

「高市くん、来ないね〜」

「ね。お休みかなあ？今日メアド聞こうと思ってたのに、ちらほらとこんな声が聞こえてくる。」

真はモテる。昔から。

顔がいいからだけじゃない。

あの男は、女の子に夢や幻想を見させるのが上手過ぎるのだ。

「高市くん、来て早々人気だね〜。カツコイイし、わかるけど」

園田千鶴が笑った。

「そうですね」

「高見沢さんて、高市くんの中学のときの同級生なんですよ？」
え…？

「高市くんが昨日、言ってたよ」

真…余計なことを。

どうしてあなたは平気な顔で気軽にそんなこと言えるの？

「あ…そうですね。一応」

嘘をつくわけにもいかない。

「高見沢さんは二年前と全然変わらないうって言った」
は？

「そう…ですか」

全然変わらない？

何のつもり？

ガラッ

「よし授業やるぞ〜」

「あ、先生来た。じゃ、ありがとね、高見沢さん」

「あ、はい」

授業なんて頭に入って来なかった。

真が言ったという言葉ばかり反芻して。

なんか…頭…痛くなってきた…

「高見沢」

先生の声が、遠くに聞こえる。

「はい」

「この応用問題、解けたか？」

先生が指差したのは、ベクトルの一番手強かった問題。

指されそうな気がしたから、時間をかけてちゃんと答案書いて来た。

「解けました」

クラスがざわめく。

「よし。じゃあ答え黒板に書いてくれ」

「はい…」立ち上がり、黒板へ向かう。

あれ…？

なんか、目の前が

トスツ

「倒れるまで溜め込むところも、そのままか」

しなやかで力強い腕。

大きな身体。

響く声。

ああ…

私、この腕と声を、知ってる

これは、真の

「大丈夫か？」

…！！

途端に意識がはつきりする。

「離して下さい。もう平気ですから」

無理矢理その腕を離す。

一体、いつの間に来てたの？

「すみません、今やります」

「あ、ああ。でも具合悪いなら無理するなよ」

「大丈夫です。少し立ちくらみをしただけですから」
深く息を吸う。

自分の中に沸き上がる感情を、振り切るために。
たとえばほんの一瞬でも、真の腕の中にずっといたいと思ってしまっ
た自分を、振り切るために。

もう二年も経つのに、真の声や温もりをまだ、忘れられないなんて。
情けない。

「先生」

「ん？なんだ？…えっと、高市」

「その問題、俺がやっても構いませんか」

え…

「俺、その問題解けますから」

しれっとした顔で、真は言った。

確かに真は、中学の時から数学だけは抜けて成績が良かった。

「そうか。なら高市に任せよう。高見沢、お前は無理しないで座っ
ていなさい」

気を使われてしまった。

「…はい」

言われた通り席に戻る。

真は、ノートも見ずにサラサラと解答を書いていく。

どうして今さら、助けるの？

わからない。

何もかも。

「おい。お前保健室行っておけよ」

授業が終わったとき、真つ先に真は私の席に来て、言った。

「別に、大丈夫です」

顔が、上げられない。

お願いだから

今、話し掛けないで。

今、優しくしないで。

今、思い出させないで。

…私は

「失礼します」

よく通る声、教室に響いた。

え…今の声…

「あ、会長だ」

上がった声が、予想を確信に変える。

つかつかという規則正しい足音が、私の席の横で止まった。

「君が、高市真くん？」

表の会長が、言った。

二年ぶりに再会した俺の元恋人は、不思議なほど何も、変わっていなかった。

優しくて、純粹で、繊細で。

そのくせ、そう簡単には手折れそうにない。

まるで、頼朝の前で恐れもせず義経への愛を歌ってみせた白拍子、静のような。

俺は今も昔も、彼女の後ろに遠い過去に生きた一人の白拍子を見る

恐る恐る、顔を上げる。

「あんた、誰？」

真はじつと会長を見つめていた。

「俺はこの学校の生徒会長の、瀬戸内晃斗。よろしく」

「…よろしく」

「今日は生徒資料を渡しに来たんだ。校則とかはこれに書かれてるから、確認しておいて。何かわからないことがあったら、俺に聞いて。隣のクラスだから」

「…ああ」

何だろう…

嫌な予感がする。

「高見沢」

私にも用事？

「はい」

「ちよつと来て」

え…

これは…
「は…いい」
嫌な予感、的中？

廊下に出ると、会長は私の腕を掴んで有無を言わず引きずって行く。

「どこに行くつもりですか？会長」

「…保健室だよ」

表の声で、会長は当然のように言った。
え？

「どうしてでしょう」

「君が疲労困憊の顔をしているから」

「え…？」

ガラッ

ボタン！

「保健の先生、いないみたいだね」

「そう…ですね」

「熱測つて。ほら、体温計」

ぽいと投げ渡される。

「…はい」

大人しく従っておくことにして、私は体温計を脇に当てた。
なんか本当に、具合悪いかも…

ピ。ピ。ピ。

体温計は、37.8 を示していた。

熱、あつたんだ…

「やっぱりか」

私の手の中を覗き込んで、会長は言った。

「よくわかりましたね。ちょっと見ただけで」

「わかるよ。もう一年以上も一緒に仕事をしているんだ」

「あ……」

ハッとした。

私、何を言うつもりだった？

「すみません…何でもありません。お礼を言いたかっただけです。ありがとうございますました」

腕を、離す。

おかしいのは、私もだ。

もう瀬戸内晃斗には知られているとは言え、学校で素を出しそうになるなんて。どうかしてる。

「そう」

私に背を向けたまま、彼は言った。

「辛いなら早退して。担任には俺から言っておくから」

「はい……」

パタン

昨日のことは、夢じゃない。

でも、現実でもないみたい。

躍らされて。

馬鹿みたいだ。

私は目を閉じた。

眠りの中に逃げ込むように。

そして、夢を見た。

暗喩に満ちた、鮮やかで、秘めやかで、哀しい夢。

深い青が、辺り一面を染め上げる世界。

黒地に金で模様を描いた仮面の男が、私に言う。

「この国では、仮面を外すことはすなわち、この国での死を意味する。わかっているだろう？」

私は頷く。私もやはり、白地に銀の模様の仮面を被っている。

「でも、僕が本当の自分を取り戻すには、この国を出るしかないん

だ。リスクを冒しても、僕は仮面を外すよ」

「あなたが行くのなら、私も行く」

私は男にしがみついた。

「おやめ、共に来るのは。君の居場所はここなのだから。僕では君を幸せにできない」

男はやんわりと私を振り払う。

「どうして！私はあなたを好きなのに」

「君にはもつと相応しい人がいる。君の婚約者は、いい人だよ。きつと君を幸せにしてくれる」

なおも追い縋る私の手を、彼は押し戻した。

「ひどい…」

「そう、そうやって僕を恨んで、嫌って、忘れてしまつといい」
彼は寂しげに言った。

「そんなことできないの、わかっていくくせに」

「君は優しすぎるんだよ。それが君の短所だ」

彼は行ってしまう。

そしてもう二度と、ここへは戻らない。

どんなに待っても。

永久に。

だから…

「…好きよ」

せめて最後に、言わせて。

「たとえあなたが私を忘れてしまつても」

私は、彼の仮面に手をかけた。

仮面を外せば、彼はこの国でのことすべてを忘れてしまつ。

「あなただけを、愛してる」

カラン

仮面が、落ちる。

後に残るのは、青く美しい闇。

私の発した言葉の、残響。

ただ、
それだけ

1 8 (前書き)

真目線からのスタートです

「高市くん」

昼休み、教室を出るとすぐに、生徒会長に呼び止められた。

「ちよつといい？」

瀬戸内晃斗。

理緒の異変を一瞬で見て取った。

たぶん、こいつは…

「何？」

連れて行かれたのは生徒会室。

生徒会長の特権をやつたな。

「聞きたいことがある」

おう、単刀直入。

「中学の時、彼女と何があつたんだ？」

やっぱりな。

「彼女？」

「高見沢理緒のことだよ…君、わかっているんだろう？」

「まあね。でもあんたに教える義務はない」

俺は吐き捨てた。

気に入らない。

こいつの、妙に優等生じみた喋り方。

この世の中に、芯からの優等生なんて存在しない。

こいつにも、必ずどこか穴がある。

それが、わかってるから。

いらつく。

こいつは、繕うのが上手い。

綻びが、見えない。

「それはそうだけど」

と、瀬戸内晃斗は苦笑した。

「昨日の彼女の様子がおかしかったのは、たぶん君のせいだろうか？
今朝のあの顔を見てもね。」

君は知ってるんだろうけれど、彼女は余程のことがなければ、揺れない。だから気になるんだよ」

瀬戸内晃斗が、俺を見た。

ゾクッ

？

今のは、何だ？

「理緒は俺の元カノ。それだけだよ」

奴から目を背けるように、俺は言った。

「…それだけ、ね」

「何だよ」

「いや。いいんだ。後は直接彼女に聞くよ」
は？

直接聞く？

理緒に？

お笑いだ。

「いいぜ。教えてやるよ」

俺は言った。

教えてやるよ。

そして、見てやる。

その優等生面が歪むところ。

欲しい女が他の男に汚された奴の顔ってやつを。

額に当てられていたタオルが、ぽとりと落ちた。

起き上がると、もう昼過ぎだった。

三時間近く寝ちゃったんだ…

「あら、起きた？」

保健医が私を見た。

「先生…勝手にベッドを使ってしまつてすみませんでした」

「いいのよ。それよりあなた、寝るときくらい眼鏡外しなさい。起きちゃうと悪いから外さなかつたけど、ちゃんとリラックスできる格好で寝ないと、睡眠も逆効果になることがあるから」

「はい」

危ない。外されなくて良かった。

「すつきりした顔してるわね。顔色も良くなつたし。一応熱測つてみて」

「わかりました」

確かに、ゆっくり寝たら、ずいぶん楽になつた。

ピピピ

「どつっ？」

「36.8 です」

もう熱、下がつてる。

「午後からの授業、出てもいいですか？」

「ええ、あなたが大丈夫なら構わないけど。でもまだ本調子じゃないから、無理はしないように」

「はい」

…会長に、お礼、言わないと…

キーンコーンカーンコーン

四限の終わりのチャイムが鳴る。

「じゃあ行きます。ありがとうございました」

ベッドを直し、タオルを保健医に渡す。

「あ、それ、保健室のじゃないわよ？」

「え…？」

「あたしが帰つて来たらもうあなたのおでこに乗つてたの。てつきりあなたが自分のタオル使つたんだと思つてただけ。違つたのね？」

「違います」

「じゃあ、まさか、会長が…？」

「でも、持ち主の心当たりはあるので、その人に聞いてみます」

「そう？じゃあお願いするわね」

私は保健室を出た。

「あれ、理緒ちゃんじゃん。体調平気なの？」

階段のところで聞こえてきたのは、耳慣れた声。

「草野先輩…」

茶髪にピアスに柄ものシャツ。今日も教師泣かせの格好だ。それでも昨日よりまだまともに見えるのは、ちゃんと制服のズボンを着ているから。

「今日は風紀検査の日じゃありませんから減点はしませんけれど、その格好はいい加減やめてください」

「え〜だって、似合うだろ？」

そうなんだけど。

似合うけど。

イメージぴったりだけど。「そういう問題じゃありません」

「ひどいなあ…理緒ちゃん具合悪そうだったからタオルかけてあげたのに、そんなこと言われなきゃなんないんだ？俺」

え…

手の中のタオルを見つめる。

「じゃあこれは、草野先輩の？」

「これは…先輩のもですか？」

「うん」

会長じゃ、なかった…

「そうなんですか。ありがとございました」

頭を下げる。

「いえいえ。俺的にはお礼言ってくれるより、一日デートしてくれるほうが嬉しいんだけど」

相変わらず、軽いなあ…この人は。

「それはお断りします」

「冷たいなあ理緒ちゃん。まあそうじゃないと理緒ちゃんじゃないけど」

「褒め言葉と受け取っておきます」

「はは。やっぱり手強いな。さすが」

何がさすがなのかさっぱりわからない。

「ねえ」

「はい？」

「何で笑わないの？」

「…はい？」

「理緒ちゃんて全然笑わないじゃん。しかも、なんか…何となく、無理に仏頂面作ってる感じがすんだよね」

何なの、この人。

今までこんなこと考えながら私に接してたの？

怖い人。

「気のせいでしょう」

「そうかな」

「ええ、間違いなく」

誰にもそんなこと、感じさせたことはないと思っていたのに。

「笑ってなよ」

ふわりと、何気なく、先輩は言った。

「笑ったらきつと、可愛いのに」

脱力。

この人はまた…

よくそんな恥ずかしいセリフをサラッと…

でも、今までこのダサイ格好の私にそんなこと言ってくれる人、いなかった。

ただこの人がもの好きなだけだろうけれど。

一人も、いなかったのに…

返す言葉が、見つからない。

言えば言うほど、先輩の言葉に敵わないことが明白になりそう。黙ってしまった私に、先輩は微笑んだ。

「じゃ俺、行くから。お大事に、理緒ちゃん」

私のすぐ横を、通り過ぎて行く。

「先輩」

やっぱり私、おかしい。

「…ありがとうございます」

綻びは、こついつところから出るのかもしれない。

こんな言葉が、頭の隅をよぎった。

「その今の顔、すごい、可愛い」

先輩が、今まで見たことのないような、幸せそうな顔で、笑う。可愛い、なんて。

中学の時までは、言われ慣れてきた言葉なのに。どうしてだろう？

その言葉が今とても、あたたかい。

上気する。

顔が。

熱い。

なぜ？

「失礼します」

早鐘を打つ胸を抑えて、階段を駆け上がる。

やっぱり、おかしい。

おかしくなってる。

“表の顔”なら、こんなに揺れない。

私の仮面、外れかかっている。

だとしたらそれは

誰のせいだろう？

どうしたんだろう？

二年の教室のある三階段に上がってすぐに、こう思った。

何やら全体が騒がしいような

「あ、高見沢さん！体調平気？」

教室に入ると、園田千鶴が言った。

「園田さん。私は大丈夫なんですけど…：どうかしたんですか？この騒ぎ」

「それが…」

「聞いてよ、高見沢さん！」

次々に声が割り込んでくる。

「高市くんがさ」

真が？

「生徒会室で」

生徒会室？

「瀬戸内会長のこと殴ったらしいよ〜！」

会長を？

殴った？

「もう今大騒ぎ！」

「会長頼すつごいハレてて〜」

「高市くんもなんか怖い顔してたし…：」

「どうしたんだろうね」

「昼休み二人して消えたと思ったたらさあ」

「てゆーかそもそも何の用だったんだろうね」

真が瀬戸内晃斗を殴った？

真と、瀬戸内晃斗。

いさかいになるような話題。

生徒会室。

考えられる共通点は……

私だ。

でも、どうして…

「二人は今、どこに?」

「校長室らしいよ。呼び出されて」

校長室…

「そう…」

踵を返そうとして、固まった。

行って、どうする?

訳をきく?

私が原因なんじゃないの、と?

きいてどうする?

そんなことをすれば、また私自身が綻びをさらすだけ。

それだけだろう。

“表の私”には、行く理由がないのだから。

でも…

このまま教室にいることも、したくない。

「生徒会室の様子を見て来ます」

私は言った。

生徒会室は、静まりかえっていた。何事もなかったように、いつもの通りに。

この、限られた人間しか入らない、閉じられた部屋は…

昨日の会話も。

剥がれた仮面も。

強引なキスも。

今日のこの騒ぎの原因も。

すべて、呑みこみ。

覆い隠す。

私にとってこの部屋は、パンドラの箱。最後に残されるものが希望であるかはわからないけれど。

わからない。

もうすぐ、昼休みが終わる。

でも、教室には戻りたくない。

あの喧騒の中には戻りたくない。

なら…どこにいればいいんだろう？

コンコン

遠慮がちなノックの音が、静寂を破る。

「高見沢さん？いる？」

園田千鶴

「はい。今出ます。どうかしましたか？」

廊下に、出る。

秘密を守る部屋のドアは再び、閉じられる。

「さつき、高市さんと会長が戻って来たんだけどさ。なんか先生が、

高見沢さん呼んで来いって言うてて。校長室」

呼び出し…

「わかりました」

厄介なことになるかもしれない。

「でも、何で高見沢さんなんだろうね。高見沢さん何か知ってるの？」

「いえ…私がどちらとも顔見知りだからかもしれない」

それだけなら、問題はない。

でも、それ以上のことを突っ込んできかれた場合は……

ごまかすにしても、限度がある。

原因が本当に私なら……

ありえないことではないから。

巻き込まれるかもしれないとは、薄々思っていたけれど。

「じゃあ行きます。もし次の授業までに戻れなかったら、先生に伝えてもらえますか？」

「うん、わかった」

さあ、何を言われるのだろうか？

秘密はひとつの部屋の中に。

あとは偽り。

名もない道化たちは、偽りの華やかさの中にしか身を置けないもの。過去を閉じ込め、未来のみ夢見て、ただ賑やかに“現在”を生きる。

秘密は降り積もり、降り積もり…

それでも決して、消えることなく。

すべてに忘れ去られてなお、鮮やかに、色褪せることなく。

いつか暴かれる日を待っている。

「君は悪役にはなれないよ」

軽く笑みすら浮かべて、瀬戸内晃斗は言った。

馬鹿にされた、わけじゃない。

そんなもんじゃない。

俺は、蚊帳の外に置かれたのだ。

敵にすらならない、と。

ふざけんな。

「ムカつく」

「何が？」

「その優等生面が」

「そう。悪いけど、これが素なんだ」

白々しい。

本物の優等生が、今の話を聞いて表情ひとつ変えずにいられるわけがない。

まして、あんなふうに笑えるわけがない。

絶対に。

「こんな話聞いて、あんたはあいつをどうする気なんだ？」

「どうする気…？」

「あんた、理緒が欲しいんだろ？」

どちらの理緒が欲しいのかは知らないが。

第一この男は、理緒の本当の顔を、知っているんだらうか？

「そうだね。露骨に言うなら」

瀬戸内晃斗は、あっさりと答えた。

「俺は彼女が欲しい。君と同じように」

は…？

「別に俺は…」

「未練があるんだらう？めっちゃくちゃに傷つけて、消えないくらい

の跡を残したいと思うほど、好きだった女に」

何を…言ってる？

「あんたさっきの話聞いてなかったのか？俺は始めから」

「俺も、さっき言ったよ。君は悪役にはなれない、って」

こいつ…！

「そもそも、君がわざわざ自宅から遠いこの学校に編入して来たのは、ここに高見沢理緒がいたからじゃないのか？」

そう言っつて、瀬戸内晃斗は、高校案内のパンフレットを掲げて見せた。

「この紹介文は高見沢が書いた。実名と肩書きも出てる。君、これ見たらどう？」

その目にあるのは、確信に満ちた光。

こいつは、知ってる。

…そう、見た。

素人の俺でもわかるような、読みやすいよう気配りのなされた文体。懐かしい名前。

イギリスにいた二年間、忘れたことのなかった女の名前。

全部こいつの言う通りだった。

俺はもう一度理緒に、会いに来たのだ。

理由は、どうあれ。

「だとしたら？」

「さあ。どちらにしろ、俺のすることは変わらないから」

眉ひとつ動かさない。

やはり、そうだ。

俺は、敵ですらないのだ。こいつにとつては。

たぶん俺は、もう決して理緒に受け入れてはもらえないから…

「彼女、意外と押しに弱いみたいだから」

ぽつんとつぶやくように瀬戸内晃斗は言った。

は？

「何でそんなこと言えるわけ？」

「　　したから」

「は？」

今、こいつ…！

「したからだよ。可愛かったよ、泣き顔も」

まさか。

「な…まさかお前、無理矢理…」

「そうだけども？でも君に俺を責める権利はないだろう？」

当然のように。

まるで何でもないことのように。

「悔しい？」

笑いながら。

プツン

頭の中で、何かが音を立って切れるのがわかった。

許さない。

許さない。

校長室は、生徒会室から階段を降りてすぐのところにあった。

パタパタパタ

廊下に、自分の足音がやたらに響く。

嫌な、感じ。

もうすぐ昼休みが終わるとあって、廊下にも階段にも、人気はなかった。

「高見沢」

はずなのに、気がつくと、すぐ横に、会長が立っていた。

「会長」

薄暗くてよくは見えないけれど、左の頬が微かに赤い。

「高市くん、殴られたというのは、本当だったんですね」

初めて、実感が湧く。

しかし彼は、私がかけた言葉を黙殺した。

「来い」

裏の、声だ。

「ちよつと…！」

「行かなくていい。今中に高市がいるんだ。どういつ展開になるか、わかるだろ？」

真と、私。

今の状況で…

話は最終的に、どこに行くだろう？

答えは、ひとつしかなかった。

あの忌まわしい過去へ。

間違いなく。

…でも、何で？

「どうして会長が、そんなこと言っんですか？」
真じゃ、なくて。

「聞いたからだ。お前があいつにされたこと」

瀬戸内晃斗は、はっきりと言った。

聞い…た？

真から？

あのこと、を？

「今日はそのために、あいつを呼び出した。昨日お前の様子がおかしかつた原因はたぶん、あの転校生だと思っただからだ」

会長が立ち止まり、私を見つめる。

どうしてそこまで、わかつたのだろう？今日の熱のことといい…
そう思っただけれど、それよりずっと、シヨックのほうが大きかった。

「何で…そんなこと…」

あのことは…

知られたくなかった。

誰にも。

絶対に。

知られたくなかったのに。

「来い」

「あ……」

力が抜けて。

瀬戸内晃斗に引きずられるまま、私は階段を上がった。

ボタン！

生徒会室のドアが、勢いよく閉まる。

「会長……？」

ガタン

「あっ！」

抵抗する隙もなく、私は会長に抱きすくめられていた。

広い肩と胸。

強い腕。

大きな手の平。

感じる体温。

意外とひんやりとしていて、思わず抱きしめて、温めてあげたくなるような、からだ。

昨日は感じなかったことが、一瞬で頭の中を駆け巡る。

離さなきゃ。

抵抗しなきゃ。

わかってるのに……

体が、動かない。

「理緒」

瀬戸内晃斗が、私を見つめる。

昨日と同じ、真っすぐに鋭くて、容赦のない瞳縛られる。

キーンコーンカーンコーン

チャイム……！

「あ……」

口から出かかった言葉は、瀬戸内晃斗に塞がれた。

優しい、キス。

昨日とは比べものにならないくらい。

どうして？

このキスは、同情？

憐れみ？

私が可哀相な女だから？

「泣かないのか？」

「え……？」

いきなり、何？

「結局、思い切り泣けないまま、ここまで来たんじゃないの。お前」
数センチと離れていない至近距離で、彼は言った。

彼の言ったことは、本当だった。

私は、あのと看、声を上げて泣くことができなかつた。

涙なんかで癒えるものじゃない気がして。涙なんかで忘れてしまえるものじゃない気がして。

混乱していた。

怖くて。

恐ろしくて。

それなのに思い浮かぶのはただひたすら真のことばかりで。

…嫌いになれば、楽だったのだと思う。

全部真のせいにしてしまえるから。

でも、私にはそれができなかつた。

ずっと好きだった人を急に嫌いになれるほど、私は強くなかつた。

あきらめきれない自分がいた。

真が私のところに来て、冗談だったと、まだ私を好きだと言ってくれるのを、待っている自分がいた。

結局真は、来てくれなかったけれど。

「……真とは、中学二年から、一年くらい付き合ったの。私は言った。」

この人に、話してみようと思った。

この人になら、話せると思った。

「でも、中三の秋の始め頃……」

ちょうど体育大会が終わった辺り。

私は真に呼ばれて……

「放課後、美術室に連れて行かれたの。そこに、真の先輩だつていう高校生が何人かいた」

入ってすぐ。

ガチャ

背後に鍵のかかる音を聞いた。

「みんな私のことをじろじろ見てて……嫌な予感がした」
案の定、そのうちの一人が言った。

「やっぱり近くで見るとマジで美人じゃん。こんな美人とやれるなんてサイコー！サンキュー真」

「あくでも一番最初は俺ですからね。先輩たちはその後！それから、制服は破かないで下さいよ。後が面倒だから」

真？

どうして、こんなこと……？

『はいはい。わかっているって』

楽しそうに、高校生たちは笑った。

「逃げようとしたけど、無理で……三人がかりで押さえ付けられて……怖くて」

ひたすらに悲鳴を上げ続けた。

乱暴に剥ぎ取られ、皺くちゃになった制服。

ビリビリに破かれた下着。高校生たちのニヤニヤした顔。理性をなくした目の色。

それを、微かに笑みを浮かべて見ていた真。今も、鮮明。

「叫び疲れて、抵抗もできなくなった頃に、真が言った。『そいつ手なずけんの苦勞したんですから。猿芝居すんのそろそろ限界だったし』って。それを聞いた瞬間に、目の前が真っ暗になった。真は最初から、私を好きだったわけじゃなかったんだなって」
そう思うだけで、からだ全体が冷たくなっていくようで。

自分が今犯されようとしていることよりも、真のその言葉のほうかはるかに私を傷つけた。

「結局、最後までされる前に、仲の良かった友達が探しに来てくれたから…未遂だったんだけど…それから、男の人が怖くなった。男の人の目が自分に向けられただけで、からだが震えて」
だから、高校からは、素顔を隠すようになった。
もう二度と、裏切られることのないように。

私が話を終えても、瀬戸内晃斗は何も言わなかった。ただ、私のからだを包み込むように抱きしめているだけ。

無意識に、言葉がこぼれた。

「私…真が、好きだったのに」
目の奥が、熱くなる。

言葉にして初めて、わかった。

どれだけ自分が、真を好きだったか。

そしてもうその想いが、とっくに過去になってしまっていたことも。

私は瀬戸内晃斗を見つめた。

「何で……」

言おうとして、涙が、あふれた。

スツと伸びてきた彼の手が、優しく、私の眼鏡を取り去る。

限界だった。

私は泣いた。

思い切り。

声を上げて。

想いのすべてを涙の中に溶かして。

過去を洗い流すように。

泣き続けた。

仮面の外し方 番外編（前書き）

何となく思い付いたので書いてみました。

語り手は保健医・横川さおり。ちよっと男前な、お姉さんの設定のお方です。

仮面の外し方 番外編

あたしが二時間ほど席を外して保健室へ帰って来ると、ベッドに使用中の札がかけられていた。

「あら…？誰か来てたのね」

具合が悪くなつたのか、またはサボりか…

サボりだったら、追い出さないと。

誰だろう？

あたしはカーテンを引いた。

眠っていたのは、見覚えのある女生徒だった。

高見沢さん、だったかな。生徒会の副会長で、すごく真面目な…

間近で顔を見るのは初めてだ。

それにしても…

寝るときまで眼鏡に引っ詰め髪…

隙がないのにもほどがあるわよ。

「こんな格好で寝てたら、逆に疲れちゃうじゃないの」

あたしは、彼女のビン底眼鏡をそつと外した。

正直なことを言えば。

見てみたかっただけなんだけど。

この子がホントはどんな顔してるのか。

驚いた。

「うわ、キレー」

思わずため息。

あたし、高校の保健医もつかれこれ六年やってるけど、こんなキレーな子初めて見たわ。

ちよつとギヤップ激しすぎでしょ……

いや、逆にそのせいで余計綺麗に見えるのかもしいけど。

うわ

いいもの見たなあ。

何でこの子、わざわざこんな堅苦しい格好してるんだろ。性格？

それともまた別な理由があるのか…

男嫌いとか？

これはありそう。

こっただけ美人だったら、決していいことばかりじゃなかっただろ
うし。

て…

何勝手にあたし、憶測してるんだろ。

まだコドモなんだし、いろいろあるわよね。

「横川先生」

ドキ

慌てて眼鏡を元のようにかけ直す。

「どうしたの？」

立っていたのは、これまた有名人の、瀬戸内晃斗くん。こちらも、
まともに会話するのは初めてかもしれない。

彼は、まあ、こっただけ美形で爽やかで優しい、プラス生徒会長と来
れば、そりゃモテるでしょう…という印象の子。

事実、女の子の間ではとても人気があるらしい。

「瀬戸内くん…高見沢さんのお見舞い？」

あたしは言った。

自然に笑えているといいけど。

ってゆうか、いつ入って来たの？全然気づかなかった。

今高見沢さんにみとれてたの、見られてたかも。

そうだったら、仮にも教師としては、ちよつと恥ずかしい…

「ええ。高見沢の具合、どうですか？」

「今眠ってるわ。熱はまだあるみたいだけど、そんなに心配するこ
とはないわね」

大丈夫：なのかな？

うん、そう思っておこう。

気にしない気にしない。

うん。

「そうですか」

頷いて、瀬戸内くんはにっこり笑った。

王子様オーラ、全開。

似合う。

怖いくらい似合う。

何なのこの子！

「優しいんだね。わざわざこの短い休み時間に来るなんて」

「そんなことありませんよ」

「あるわよ。謙遜しなくていいわ」

「本当に、優しいわけじゃないですよ。高見沢の寝込み襲いに来た

んです」

は…？

今の、空耳？

なんだかとても似つかわしくない単語が聞こえたような…

「え？」

「だから、寝込み襲いに来たんです」

現実？

その微笑みでそれを言うの？

「それは…」

「冗談ですよ」

あ、ですよね。

一瞬本気にしかけたわよ……

「そりゃそうよね」

「ええ。そんなことしたら俺、犯罪者じゃないですか」

うん、間違いなく犯罪者だね。

「ただちよつと気になったんですよ。俺にも責任の一端はあるから」

責任？

何か、あつたのかな…？

彼は、それ以上のことは聞くなというようにあたしから視線を外し、高見沢さんの眠っているベッドのほうを見た。

そのとき、何となく、わかった。

「…大事なのね」

高見沢さんが。
とても。

たぶんまだ本人も、はつきりとは気がついていないんだろうけど。
表情が、すごく柔らかいもの。

「そりゃあ、大事ですよ。彼女は優秀な副会長ですから」

彼は、さらりと答えてみせた。

顔色ひとつ変わらない。

さすがだわ…

「じゃ俺、そろそろ行きます」

言われてみれば、十分の休み時間なんだっけ。

「ええ。しつかり授業受けて来なさい」

一応、最後は教員らしくしよう。

そう思つて、言ってみる。

「はい」

彼は、出て行くこうとして…

ドアのところで突然、振り向いた。

「先生」

「何？」

「さっき先生が見たものは、先生の胸の中だけに納めておいて下さい」

彼は、意味ありげに言った。

あっちゃ〜

やっぱり見られてたんですか…

てゆうかこの子も、知ってるわけね。高見沢さんが実は相当美人だ
っていうこと。

「わかりました」

始めから、いいふらす気はなかったけど。

人にはそれぞれ事情ってもんがあるんだし。

「それなら、いいんです。失礼します」

彼は出て行った。

私は、もう一度、何も知らずに眠り続けるお姫様を見つめた。

王子は意外とすぐ近くにいたよ。

あたしは物語の登場人物にはなれないから、陰から見守らせてもら
おう。

誰よりも美しいあなたが、やがて王子のキスによって目覚め、恋を
する、その瞬間まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667i/>

仮面の外し方

2010年12月11日01時01分発行